

おはなし散歩道

こいのぼりの信心

柏市 木村 研

「わあ。まぶしい」

一年ぶりに箱から出されたこいのぼりは、おおきな目を、しょぼしょぼさせました。

ひろくんが生まれたときに、田舎のおじいちゃんからおくられたこいのぼりです。

こいのぼりは、一年に一度、ひろくんにあえるのをとても楽しみにしていました。それなのに、今年はずっとろうかにおかれたままです。

こいのぼりは、(ひろくん、ぼくのこと、きらいになつちやったのかなあ?)と、心配になってきました。

そんなある日、おばあちゃんが、「ひろくんのお見舞いについてきますね」とって、お出かけしてしまいました。

すると、スズメたちが

庭に飛んできておしゃべりを始めました。

こいのぼりは、スズメに聞いてみました。

「ひろくん、知らない?」「ひろくんなら、入院してるよ」

「入院?」

「そう。入院。まだ、寒いころだったわ。救急車で運ばれていったわ」

「町の病院よ」

スズメたちは、なんでも知っています。

「じゃあ、ひろくん、いつ帰れるの?」

「熱が下がったらね」

「まだ、熱があるの?」

「そうみたいね」

「じゃあ、どうしたら熱が下がるの?」

こいのぼりが、あんまり聞くものですから、スズメは、めんどくさくな

って、

「そんなら、高尾山に行

って、お不動さんにお参りしてきたら」というと、どこかに飛んでいってしまいました。「そうか」

こいのぼり

は、身体をよじって窓を開けると、風を吸い込んで、ふわんと空に浮かびました。

そして、高

尾山に向って飛んでいきま

した。

高尾山には、今日もたくさん

の人がお参りに来ていま

した。

こいのぼり

も、

「ひろくんが、早く元気になりますように」

と、一緒にお願いで帰ってきました。

つぎの日もつぎの日も、そのまたつぎの日も、こいのぼりはお参りに行き

ました。そのおかげでしようか?ひろくんは、子どもの日を待たずに退院してきました。

ぼりをかかえて下りてきました。こいのぼりは、大喜びです。ところが、ひろくんが

「あれっ?」と目を丸くしました。

「どうしたの?」

「だって」

こいのぼりのお腹に、赤いスタンプがついているからです。

「まあ」

おばあちゃんも、目を丸くしました。

だって、そのスタンプは、おばあちゃんがお参りに行ったときに押ししてもらっている朱色のスタンプだったからです。

おばあちゃんも気がつきました。

「ひろくんのために

お参りに行ってくれたんだね。ありがとうよ」

こいのぼりは、幸せ気分

で、今日も元気に泳いでいます。

(おわり)

(さし絵・小出 茂)



「美しさ」溢れる人生

友納あけみ

友納あけみ

「暑と寒さも彼岸まで」

「一雨ごとに春が来る」

昔から言われている通り、

一日、一日、春が近づいて

来てくれるようです。

最近つくづく昔からの格

言が身に滲みます。本当

にそうだよ、とつい言

いたくなって、これはや

はり歳のせいかしら。

「時薬」という言葉が

あるそうです。辛いこと

や悲しいことがあった時

も、もうどうしようもなくな

ったら、兎に角、過ぎて

いく時に身を任せれば、

「時」が何よりの薬。い

つか癒してくれる、本当

にそう思います。私も何

度もお世話になりました。

あの震災からもう四年の

月日が過ぎて行きます:

「時薬」が被災された

方々にも効いて、少しでも

心安らかな日々がもたら

されることを祈るばかり



桜が咲き、メジロと共に春が訪れる 撮影・高岡輝幸氏

りです。もうすぐ、被災地にも桜の花は咲いて、春が訪れてくれます。友納あけみコンサート 第二十二章「人生は美しい」*六月十二日(金)

がどんなに素敵なものなのか気が付いてほしい。」とお話していらつしやいました。いつか、命が終わる時が来たら、人は心の中で旅をする気がします。: 人生を振り返り、その一番輝いていた、日々、場所、人: 美しい情景の瞬間を巡る旅を。それは決して特別な瞬間ではなく、案外、何でも

り前だと思っっている物の中に、無くしてみると気がつく、美しく素晴らしきものがたくさん潜んでいる気がします。朝、目覚めることも、空が青いことも、思いっきり深呼吸できることも、人を愛せる事も、語り合えることも: 笑えること、泣けること、歌えること、走れること、聴けること: 数えきれない優しい、柔らかな沢山の恵みが与えられていることを忘れてしまいがちです。人生には沢山の「美しさ」が溢れています。

厄年を過ぎた御信徒の皆様へ 六十才の厄年を過ぎたなら 一年・一年を 七十才を過ぎたなら 暑さ、寒さを 八十才を過ぎたなら 春夏秋冬を 九十才を過ぎたなら 一日・一日を 気を付けられ 日々を大切に 圓滿にお暮し下さい。

渋谷・さくらホールも、もう、あと三か月足らずになりました。震災でご家族も故郷も無くされた女性の方が「もし帰れるものなら、あの日の前の普通の生活に帰りたい。普通の生活

ない日々の営みの中にある情景なのかもしれません: そして、もし、許されるのなら、その美しい情景をもう一度味わいたい、そう願う気がします。何気なく過ごしている日々の中に、あつて当た

もうすぐ桜も咲きだします。美しいエネルギーをもらって、あと三か月、舞台創りに励みます。お申し受け致しております。

福寿圓滿の 当山では皆様の (身体健全 寿命長久) を祈念して 福寿圓滿の 護摩を お申し受け致しております。